

『菊と刀』再考

はじめに p2

1. 日本人の行動規範は「利」のみか p2
 - 1-1. 気心の知れない日本人 p2
 - 1-2. 失われた美しい道徳性 p2
 - 1-3. 日本人の行動規範は”利”のみか p3
2. 日本社会の基本的な構造 p3
 - 2-1. 日本社会の基本的な構造の成り立ち～「ムラ」と「イエ」 p3
 - 2-2. 「枠」の中で生きる日本人～生き抜くための基盤としての「枠」 p3
 - 2-3. 敬語は階層的社会の証拠～「礼」 p4
3. 日本人の最大の価値観は「安心」 p4
4. 日本人が忠誠を誓うもの p5
 - 4-1. 日本人が忠誠を誓うもの～「信」 p5
 - 4-2. 日本人が忠誠を誓うもの～共同体という「枠」 p5
5. 日本人における個人の尊厳 p6
 - 5-1. 日本人における落伍者の切捨て p6
 - 5-2. 日本人における基本的人権 p6
 - 5-3. 日本人における決定のプロセス～「多数決」と「根回し」 p6
 - 5-4. 日本人におけるリーダーの本質～主導者というよりも管理者 p6
6. 明治政府が行ったこと p7
 - 6-1. 明治政府が行ったこと p7
 - 6-2. 温存された伝統的な階層秩序と行動規範 p8
 - 6-3. 日本における階層制における秩序維持の思想 p8
 - 6-4. 階層制による社会秩序維持の限界点 p8
7. 日本人の伝統的文化 p9
 - 7-1. 現代でも生きている日本人における「恩」の役割 p9
 - 7-2. 「恥の文化」 p9
 - 7-3. 日本人における「恥」の意義 p10
 - 7-4. 日本における恥の文化の現状～イジメとパワハラ p11
 - 7-5. 「恥」に対する過敏症が招く悲惨な結果 p12
 - 7-6. 「恥」を忘れた日本のリーダーたち p12
8. 現代の会社組織の中を流れるもの p13
 - 8-1. 現在の会社組織の中を流れるもの p13
 - 8-2. 統合化による全体作用の重要性 p13
 - 8-3. 社会構造の変化と行動規範の変化 p14
9. 日本共同体の進むべき道 p15
 - 9-1. 敗戦直後から見た日本の将来像 p15
 - 9-2. これからの日本人は何に拠って生きるべきか～失われた「枠」 p15
 - 9-3. 相互義務の履行 p16
 - 9-4. 日本的共同体の進むべき道 p17

参考文献 p19

『菊と刀』再考

はじめに

『菊と刀』が執筆されたのは太平洋戦争の末期、1944年(昭和19年)から戦争直後の1946年(昭和21年)にかけてである。2014年現在、明治維新後146年、戦後69年を経過した今、本著に書かれている日本人の文化において既に失われたものの変化したものも多くあるが、未だ日本人における行動原理として機能しているものも多く存在しているであろう。

明治維新(1868年)から終戦(1945年)にいたる77年間における日本人における行動原理の変容については本書においてその概要をうかがい知ることができるが、戦後から現在に至るまでの間については本書を手がかりに自分の実体験から見て、何が消え、何が変化して、何が新たに加わったのか推定してみるしかない。

戦後の高度経済成長期を経て、現在のグローバル経済環境下における閉塞的停滞期に至るまでの間に日本人における多くの行動規範はその目の前の”利”の獲得という目標に合致しないと思われるものは容赦なく切り捨てられてきたように思える。余りにも劇的な制御不可能な環境変化の中で、本来失ってはならない日本人としての行動規範も多くあったはずである。グローバリズム・利益至上主義の中にあっても強かに機能する日本人における伝統的な行動規範および行動原理の再発見ないしは新たな創造が求められている。

1. 日本人の行動規範は「利」のみか

1-1. 気心の知れない日本人

ベネディクトはしの著書の『菊と刀』の冒頭において日本人について次のように述べている。

「日本人はアメリカが国をあげて戦った敵の中で、最も気心の知れない敵であった。大国を敵とする戦いで、これほどはなはだしく異なった行動と思想の習慣を考慮の中に置く必要に迫られたことは、今までにないことであった。」

現在の日本人の姿はどのようであろうか。現在は日本人同士の間においてすらも相手が何を考えているのか分からないくらいに、その価値観の不整合が見られる。「隣は何をする人ぞ」という言葉に表れているように他人に関する関心や思いやりの気持は薄れ、社員の身分も正規雇用者と非正規雇用者に分断される中、増大する不安は個々人を急激な孤立化に追い込み、日本人としての共通の思想および行動規範を失いつつあると思われる。

1-2 失われた美しい道徳性

ベネディクトが示した日本人の長所は近年急速に失われつつあり、彼女流の表現を借りて言うならば次のようにも言えるであろう。

日本人は礼儀正しくもなく不遜で尊大である。日本人は自分の考え方に執着し新奇な事柄に容易に順応しない。日本人は従順であり、上からの統制に文句もいわずおとなしく従う。日本人は忠実でもなく寛容でもなく他人に平気で意地悪をする。日本人は勇敢でもなく臆病者である。日本人は他人の評判ばかりを気にして自分の良心を顧みない。日本人はロボットのように働かされてもまったく反抗すらしない。日本人は西欧の学問にも興味を抱くことはなく、同時に保守的でも改革的でもなく全くの事なかれの的である。美や芸術に対する唯一の心の表現は”かわいい”であり、個人や国家に対する名誉や誇りは持ち合わせていない。

全体すべてがそのようにはなっていないと願うばかりであるが、世の中の潮流はかなりそのような傾向を強めているであろう。

1-3. 日本人の行動規範は”利”のみか

戦後、表向きの階層制が撤廃され自由競争による社会になったが、放任された自由競争の社会の成り行きとして一強九弱のいびつな階層社会を招いており、ノブレス・オブリージュの気風は全く失われ、世の中の唯一の行動規範は”利”のみとなった観がある。よって全ての階層において日本の伝統的な行動規範が急速に失われつつあり旧来の階層的な組織は崩壊しつつある。

注. ノブレス・オブリージュとは、「位高ければ徳高きを要する。」(noblesse oblige)こと。

2. 日本社会の基本的な構造

2-1. 日本社会の基本的な構造の成り立ち～「ムラ」と「イエ」

日本は古来、稲作を中心とした各地の村落共同体「ムラ」によって構成されていた。また村落共同体「ムラ」の基本構成単位は血縁による家族の「イエ」であった。これら「イエ」の集合体である「ムラ」においては共同作業を必要とする稲作によるさまざまな集団内の約束事や規則を作り出し、社会文化および社会構造を作り上げてきた。まさに日本人においては「稲」は日本人の命を保障する「安心・安全」の基盤であったと言える。

江戸時代においては、日本人は士農工商という厳格な役割分担の階層社会の中で稲作を中心とした農業に支えられてきた。明治初期までは人口の八割以上が農民であり、今次敗戦時においても五割超が農民であった。日本の庶民における生活基盤およびその行動規範は農村共同体において作り上げられてきたものであると言える。戦前戦後を通して農村から都市へと多くの人口が移動し、都市における中心的な共同体である会社組織や国家官僚組織の成員も多くは農村出身者あるいはその子孫にて形成され、これらの組織における行動規範はやはり日本の農村をその出自とする伝統的な行動規範によって運営され続けている。

2-2. 「枠」の中で生きる日本人～生き抜くための基盤としての「枠」

山本七平は、日本の文化は「枠」の文化であるとして次のように述べている。「日本文化は稲作を中心とした盆地文化であったといわれ、それはまた山と海に挟まれた一定の固定された地域という「枠」の中で生まれ、またその生活および労働は既知の約束事に従って毎年毎年繰り返される共通の伝統的な行動規範という名の「枠」に基づくものであった。」[山本七平、『日本人と組織』]

この「地理学的な枠」と「伝統的な行動規範の枠」は日本人における命の保障を託するに価するものであった。これらの「枠」は日本人における進むべき道を示す「地図」ないしは「羅針盤」の役割も果たした。

更に江戸時代において士農工商という身分制度による新たな「枠」が加えられた。この枠は従来の「地理学的な枠」と「伝統的な行動規範の枠」を強化し、特に農民層においてはその本能レベルにまで刷り込まれる程の影響を与えたと言っても良いであろう。

日本人はこの三つの枠、すなわち「地域という枠」と「伝統的な行動規範の枠」および「身分制度の枠」に全面的な信頼をおきその共同体に忠誠を誓うことになった。この三つの枠に拠って日本人は安心と安全と生きる保障を獲得し、温暖湿潤な気候に恵まれた環境において生き抜いてきたと言える。

これらの三つの枠は、既知の環境において既知の作物を既知の規則に従って作ってさえすれば、ほぼ確実に収穫の実りを人びとにもたらしたのである。人々における生活の目的・目標はすべて既知のものであり新たに模索する必要がほとんどないものであった。このような国民性は、新たな目標を常時自ら創造しなければならなくなった今日の日本人における欠点となり国家的な停滞の大きな原因となっている。われわれ日本人における、自分の頭で考えそれによって行動するという「自律性」の欠如は、結局、与えられるものとしての「目標」しかもてなかったわれわれ自身の歴史的背景に起因しているのであろう。近年よく「自己責任」を問うというようなことが言われているが、

自律性のないものに対して自己責任を問うこと自体無意味なことである。自分の意志で行動していない者においてその行動の責任を取れと要求しても、要求された方は全く判然としないのである。

日本の教育においても戦前戦後を通してそのやり方は「答えの分かっている問題」を解くことに重点が置かれ続けている。このことは既知の目標に対しての最適なアプローチではあるが、未知の問題に対してはほとんど無力である。自分自身で新たな環境に対して新たな目標を見つけるためには、既知の解法では見つからないものを、自分の頭で考える「自律性」が必要とされる。すべから「契約」にてものごとが行われている欧米社会では「契約」は自分の問題に他ならず、自分の頭で常にそれを判断し行動を決定するように動機づけられているから、常に「自律性」が要求され「自己責任」が問われるのである。

敗戦直後、昨日までお上の指示で軍国主義を教えていた教師が次の日から民主主義を教えられるわけもなく、今日においては昨日まで暗記式の詰め込み教育を行っていた教師が自分の頭で自律的に問題を考える教育ができるわけもなく、昨日まで上司から言われたままの仕事をしていた人間が今日から自分の頭で判断し仕事を進めることができるわけもない。当たり前のことである。現在においても多くの組織においてはその地位の上下を問わず多くの人間がこの「自律性」をもてずに、指示待ち的な従順な羊の群れとなっている。今までにおいてもこの自律性をもった日本人は数多くいたことは確かなことだが、このような人間に対する評価は常にいまでも「和を乱す者」「変人」「異端者」として扱われることが多い。彼らは和を乱す者でもなく、変人でもなく、異端者でもない。彼らこそ新たな和を作り、新たな目標を創造し、われわれ日本の共同体を導く者であり、この激動期における伝統的な行動規範の真の発展的継承者であるだろう。

現在日本が直面しているグローバルな経済世界は、既知の枠も既知の目標もない世界において新たな目標を自ら日々創造しなければならない世界であって、日本人が最も苦手とする世界である。モノを創造する前に目的・目標を創造しなければならないのである。「契約」の文化も持たず欧米の文化やその行動規範についての理解もなく単に外国に工場を作ったり、欧米の組織の形をまねて英語を社内共通語にすれば越えられるという程簡単なものではないだろう。

一方、西欧諸国の人々は食料を求めて放浪していた狩猟民族としての伝統文化を引き継いでおり、移動する度に新たな獲物を探す必要があり、また頻繁に未知の部族のものたちと遭遇する機会が多かった環境下においては、その狩においては目標の創造文化が、その取引においては契約文化が醸成、継承されてきたのであろう。

2-3. 敬語は階層的社会の証拠〜「礼」

敬語は日本の社会構造が階層的社会であることの証拠である。

戦後、自由平等の世界になったはずの日本であるが、いまだもって敬語は大きな力をもっている。階層的な共同体組織の中にあって、それぞれの分に相応する地位はその人物の仁徳および実力のレベルによってそれぞれ決定されるが、各階層間においてはそれぞれにふさわしい敬語使いや振舞いが求められる。これは日本における基本的な行動規範の一つである「礼」に関するものである。敬語を使えない人間は日本のどのような組織や共同体においても未熟者とか半端者とみなされ相応の位置を与えられない。「ため口」を使う青年は愚か者としてしか処遇されない。

3. 日本人の最大の価値観は「安心」

グローバル競争に効果的な対応ができなかった日本においては、経済は富の収穫モードから備蓄の取り崩しモードに移行し、国内における富の循環を停滞させてしまい、それによる生活基盤の縮小および不安定化は人びとにおける生きるための安全の保証を劣化させ、国民の活力・意欲を

失わせつつある。

日本人の能力は、安心と安全が保証され目標が明確な環境下において最大限に発揮されるように条件づけられている。この条件づけに必要なことは、民衆における生きることへの保障およびそれを与える共同体への信頼に他ならない。不安定で先の見えない社会や共同体においては、その構成員の能力が最大限に発揮されることはあり得ない。

4. 日本人が忠誠を誓うもの

4-1. 日本人が忠誠を誓うもの～「信」

日本人は過去に属していた権威が機能しないと判断し新たな権威が登場した場合、その権威に対して旧来の権威と同様に忠実に従う。これは過去の権威に対する裏切り行為ともいえるが、日本人がある権威に忠実であるのはその権威が自分の安心安全を保障し信頼に値するという条件が成立している場合にのみであり、どのような権威に対しても盲従し続けるということはない。このことは短期的な目先の有利さによって自分の立場を変えるような日和見主義や機会主義とは別種のものである。決定的な違いは自分の忠誠を誓う権威に対する信頼にある。「君子豹変す」ではないが、日本人の行動原理のひとつは権威に盲従することではなく、“信”に従い、“不信”を遠ざけるという所にある。日本人がその行動を豹変させる理由はここにある。

注. 機会主義とは、ある定まった考えによるものではなく、形勢を見て有利なほうにつこうという考え方のことである。

4-2. 日本人が忠誠を誓うもの～共同体という「粹」

日本人における組織に対する忠誠心は子供時代における家庭生活において学ばれ始める。家族の意思の代表者は父または兄であった。家長は決して独裁者としては振舞わずむしろ「イエ」の名誉を汚さないという重大な責務を委託された人間として行動していた。家長は家族全員の安全と安心を勘案し「イエ」の面目を保つべく方針の決定を行った。家族はその全幅の信頼感ゆえに全員「イエ」という共同体に忠誠を誓い、「イエ」の名で決定された方針に従った。日本の家族における強い連帯性はこれによって維持されていた。この共同体に対する忠誠心および連帯性は日本の組織共同体の強さの源泉となった。

このことは家庭外のさらに大きな共同体組織においても同じように適用された。このように小集団から中集団を経て大集団に至るまで、所属する人びとはその所属する共同体に対して忠誠を誓うのであり、各共同体の長自身に忠誠を誓うものではなかった。それゆえ大組織の長であったとしても専横強権主義的行動は不適格とされ罷免の大きな理由とされた。

この共同体に対する信頼を基盤とした忠誠心は戦後の日本においても継承され続けており、この「忠誠」は会社のみならず家庭における行動規範の一つとして影響力を保っていたが、農村人口の減少、核家族化の進行、都市化の拡大、世界規模のグローバリズムの波や実体経済とかけ離れた過度の金融経済の膨張によって利益至上主義が蔓延し、人間を経済における材料の一つの地位にまで貶めている現状においては、日本国民はその生存の保障を託し真に忠誠を誓うべき対象を見失っている。

ノブレス・オブリージュ (noblesse oblige、位高ければ徳高きを要す)、すなわち社会的階層の上位になるに従って、その義務の履行と責任は重くなるという気風が失われつつある日本の社会においては階層制度および各人が所属する組織に対する信仰と信頼は大きく傷つけられ、日本人の心理的基盤である「安心・安全」が大きく損なわれてしまっている。

われわれ日本人は何に生存および信を託せば良いのか、何に忠誠を誓えば良いのであろうか。われわれの命を託せる新たな共同体の形を探さなければならない。

5. 日本人における個人の尊厳

5-1. 日本人における落伍者の切捨て

古来から、日本人は、決して倒れている仲間を放置するような民族ではなかった。天然自然において、生きとし生けるものすべてを大切にしてきた民族である。しかしながら日本の組織は、組織体の保持という究極の目標に従って、戦闘能力を失った者たちを容赦なく切り捨てるという冷酷な一面をもっている。旧日本軍においては、戦闘能力を失った者たちを容赦なく遺棄・放棄した。現代における会社組織も同様である。日本の伝統的な行動規範は、このような行為を決して認めない。「強き者も弱き者も、共に連携し、その生涯を生き抜く」ということが、日本の伝統的な行動規範である。組織における「機能性」に優先権を与えれば弱者の切捨てとなり、「運命共同体性」に重きをおけば弱者と共に生き抜くという選択になる。

日本人の集団が過去数千年を生き抜いてくることができたのは、常に「運命共同体性」に重点をおくことによって、最大の「機能性」を発揮してきたからであることを忘れてはならない。日本においては過去も将来も「共同体」に「信」を置かない集団は決して存立できないということを肝に銘じるべきであろう。

5-2. 日本人における基本的人権

米国における基本的人権を根拠にした平等観とは、すなわち個人は生まれながらにして平等であり、個人の自由は他人によって干渉されたり侵されたりしない固有の権利であるとするものである。米国における個人の拠り所は”個人における基本的人権の保証”である。一方、戦前の日本人の拠り所は、その所属する階層および共同体における応分の義務を果たすことによる”生存の保証”すなわち「信」にあった。

現在のわれわれ日本人における拠り所は形式的には日本国憲法に示された基本的人権の尊重に拠ってはいるが、実際は、個人の運命を託するに値する「共同体」であることに変わりはない。

共同体は個人に生存の保障を与え、一方、個人は共同体に忠誠を誓うことで、両者の間に「信」が成立する。

5-3. 日本人における決定のプロセス～「多数決」と「根回し」

戦前の日本の組織共同体の運営原理は西欧流の強権に拠らず、日本流の全員一致による合議制に拠っていた。現在の日本の組織運営もまた戦前のこの方法を継承してはいるが、少数の意見を尊重しない多数決という形式的な本来の民主主義ではないやり方において都度混乱や停滞を招いている。個人の尊重を基本としない多数決は民主主義ではなく強権主義である。このような矛盾を解消する方法として日本独特のやり方として知られているのが、会議の前に行われる「根回し」であり、稟議制である。多数決を優勢にするだけの根回しは強権主義と同様であり、一方すべての人の本音を聞いて少数者においても納得が得られるような方向性を見出すことが本来の正しい日本流「根回し」であろう。

5-4. 日本人におけるリーダーの本質～主導者というよりも管理者

現在でも権威に対する公然とした挑戦は強く罰せられることに変わりはないが、道徳と結束を重んじてきた伝統的な権威は、いまや利だけを重んじる金権的権威に変質しており、その両者の違いは構成員の安全と平和を保障する権威ではなく、それらを脅かすことで構成員を強制的に動かす醜いものとなりつつある。これは日本人が伝統的に嫌った強権主義であり、いつまでも続けられる権威ではあり得ない。日本におけるあらゆる階層における長に求められたことは、専横な独裁者であることではなく、共同体において重大な責務を委託された人間として行動することであった。ルース・ベネディクトの言葉を借りれば「彼は無制限の権力をもっているのではない。彼は一家の名誉を

維持するように責任をもって行動するものと期待されている。日本の家長はむしろはるかに物質的ならびに精神的財産の管理人にちかい。」

現代においても専横的な指導者は必ず社会的な掣肘を受ける。

6. 明治政府が行ったこと

6-1. 明治政府が行ったこと

明治維新は欧米諸外国による侵略から日本国を守ることを第一の目標とした勢力によって成し遂げられたが、それらの勢力の共通点としては既に国内統治能力も欧米諸外国との交渉能力も失っていた徳川政権に代わって新たな政権を樹立することであった。二百年におよぶ鎖国政策と相まって家柄と儀礼と慣習による武士階級による官僚機構は徳川幕府における実務能力を著しく劣化させその統治能力の限界を迎えていた。

倒幕の勢力となった者たちはいずれも江戸や京都から遠隔の土地に遠ざけられていたいわゆる外様大名といわれる薩長土肥の勢力であった。彼らは江戸時代の二百年間中央政治の場において重用されることも参加を許されることもなかった。

彼らは中央権力からの支援に頼ることなく、遠隔の地方において自力更生の道を歩み続け、地元の特産物の交易を通して経済を学び、富を蓄積し軍事力を増強してきた。

幕末における日本の体制保持の危機を敏感に感じとった雄藩の藩主たちは従来の厳格な身分階層制の中にあっても実力本位の必要性を強く感じ、下級の武士層からも有能な者を抜擢し藩政の重要な任に就け、藩の力の強化に努めた。当時のこれら藩主たちの目的は旧来の無能な親藩による政権を自分たち雄藩勢力によって置き換えるところにあつたであろうが、まさか明治新政府が廃藩置県、身分制の撤廃、武士の俸禄の撤廃などの仰天すべき政策を実行することまでは想像すらしなかったであろう。

彼らの経済力の強化を可能にしたものは、地元の特産物の創出と、それらを国内および海外(密貿易)へ販売する藩直営の商社的な組織をもったことである。これらの商社的な組織において経済の方法を学び諸外国から隠密に輸入された最新の科学技術および最新の武器を手に入れた。これらの雄藩における直営の商社およびそれを支えた有力な商人たちが明治時代において表舞台に登場することになり、日本の近代化および富国強兵の礎を築くことになる。

このような大改革においても日本の新しい指導者たちは、日本の階層的な社会を支離滅裂に追い込むようなことはしなかった。幕藩体制という表面的な衣を新たな時代に即した衣に替えること、言わば衣替えをするだけであり、日本人における伝統的な社会構造および伝統的な行動規範に新たな役割を与えその力を最大限に発揮させるようにした。日本人はどの時代にあっても一つの例外もなく決して革命という道は選択してこなかった。日本人の原点は、自分たちの命の原点である農村共同体ないしはそれを継承した日本的な種々の運命共同体を信じ続け、それに全幅の忠誠を誓ってきたのであり、その共同体の最終的な目標は、仲間とともに生き抜くことすなわち「和をもって尊しとなす」であり、運命共同体の永遠の存続を願うことであった。

このような改革は少数の人間だけで成し遂げられるものではない。例え薩長土肥において抜擢された人間たちがその改革のきっかけを作り先導役を務めたとしても、それに続く改革の人材が次々に輩出されなければとうていこのような大事業を遂行することは不可能であったと思われる。何が、この大改革を可能にしたのかその本質は一体何であったのかを知る必要がある。この日本人における本質はふたたび太平洋戦争における大敗北から一億の国民を救う役割を果たすことになるのであるが、それを知ることは現在のグローバル化という経済戦争における敗北、2011年3月における大震災および原発のメルトダウンという大失敗を乗り越えるための知恵をもたらしてくれるものと確信する。

6-2. 温存された伝統的な階層秩序と行動規範

明治維新における王政復古、廃藩置県、四民平等は、日本における階層的な秩序を単純化し、国家に対する忠誠を天皇ただ一人に集中させ、また国家権力の中央集権化を実現するためのものであって、日本人における伝統的な階層秩序や行動規範を破壊するものではなかった。明治維新は日本の政治経済体制をあたかも衣服の衣替えとも呼べるような手法によって実現し、伝統的な秩序維持の組織は温存され、決して世の中を根底から覆すような革命行為には走らなかった。

6-3. 日本における階層制における秩序維持の思想

戦前までの日本における秩序維持の思想は「各々其の所ヲ得」すなわち「すべてのものをあるべき場所に置く」ということであった。これは階層的な社会構造を前提とした思想で、人々は各階層においてその役割にふさわしい行動を行い、決して自分の所属する階層の範囲を越えた行動を取ってはならないとするものである。実際この階層領域を越えた活動は必ず罰せられた。「分相応」「出る杭は打たれる」などの言葉はこの思想から生まれたものであろう。一見完全な平等社会になったように見える現在においても、会社組織や他の伝統的な組織においては、身分制に代わって学閥や門閥という派閥によって階層的な秩序が継承され続けている。

6-4. 階層制による社会秩序維持の限界点

安定した社会環境下においては身分制や閥による秩序維持が機能することで組織が有効に機能するが、このような固定的階層制は社会環境が大きく変動する時代においては逆に組織の機動性を奪い生き残りをかけた競争に負ける原因となる。維新後に明治政府が行った身分制の廃止および太平洋戦争敗北後に日本政府が行った財閥解体や農地解放は、旧来の固定的階層制を廃止し実力主義の機会均等的自由競争の導入であった。

自由競争を主義とする国ぐににおいても、どのような世界にあっても長年の競争の結果として社会は、上は強い者から下は弱い者へと連なるピラミッド階層的な社会に収斂されていくものである。かの自由平等をうたう米国の現状を見れば分かるように所得上位 10%が富の 70%を所有してしまうような状況に陥っているのである。日本の現状は 6.9%の富裕層が 33.7%の純金融資産を保有している(野村総合研究所、2012年11月22日)。一旦富と権力を握ったものに持たざる者たちが戦うすべはほとんどなく、もし戦いを挑んだとしても決して勝利することはできないであろう。もはや自由でもなく平等でもないのである。新たに生まれ出た者たちに競争における同一の出発点と機会の均等を与えられなければ自由も平等もあり得ない。

過去の歴史から見れば分かるように、社会階層制の固定化と富の上位偏在はその社会の崩壊につながり洋の東西を問わず大きな人的・物的犠牲を払う事態に追い込まれることになる。人間の社会であるかぎり、またどのようなイデオロギーあるいは文化の下にあっても、人びとによる社会構造は必ずそのトップを頂点とした末広りのピラミッド型階層構造を形成するものであり、その階層的な社会構造はいつしか権力および富の偏在と集中化を生み出し、それが固定化していくことによって全ての階層における活動は不活性となり終には社会構造全体が機能不全に陥るのである。

これらのことを考えると、結局は人間における過剰な自己保存の欲求が他人を滅ぼし集団を滅ぼし、自分をも滅ぼす原因に他ならないことに思い至る。

江戸時代は 1603 年から 1868 年までの 265 年間続き、維新後の体制は 1868 年から 1945 年の終戦までの 77 年間続いた。更に戦後の体制は 1945 年から現在の 2014 年までの 69 年間続いている。日本における階層制度という上着の寿命は、その時代における日本を取り巻く諸外国との関係性の中で決定されてきたものであるから、現在の体制が後何年もつであろうかを予見することはできないであろう。しかしながら、江戸時代における静かな「農業の時代」を経て、明治から昭和期に

おける産業革命後の騒がしい「労働集約型産業の時代」を経て、戦後のコンピュータの発明、高速高性能輸送手段・産業機器の発明による「超スピード経済の時代」へと時の流れが加速化する中であって、日本の階層制度という上着の寿命もその速さに比例して短くなっているものと予測される。その意味で戦後の体制はよくぞ 69 年間ももっているものと思われる。正直なところもう崩壊しているのかも知れないが、自己保存の欲求による正常化バイアスがそれを見たくないものとして見えなくしているのかも知れない。

日本はそろそろ新しい上着に衣替えが必要なのかも知れない。

7. 日本人の伝統的文化

7-1. 現代でも生きている日本人における「恩」の役割

日本人をその精神的な根底で動かしているものは「恩」である。ルース・ベネディクトの言うように、日本人は生まれ出でたその瞬間から「恩」という一生かかっても返し切れない負債を背負わされているのかも知れない。

いまだ持ってわれわれは「恩」によって動かされている面が多々ある。戦前における「皇恩」というものはさすがに無くなってしまったが、親の恩に始まって、お世話になった人たちへの恩はわれわれの行動の動機の一部を占めている。庇護されて育った子供たちは親の恩を忘れない。就職の世話になった教師には強い恩を感じている。親の恩を忘れず自分の仕事を辞めてでも老親の介護に尽くす人も多くいる。

「恩」に属する「義理」においても未だわれわれはこの「義理」というものに強い縛りと義務を感じる。「義理」とは受けた恩恵に対して等量の恩恵を返せばよいレベルの「恩」に対して使用される言葉である。「義理」を返さなければ不義理だとか恩知らずといわれる。「義理堅い」とはほめ言葉として使われる。あちこちに「義理」の負債ばかりを作り、一向にお返しをしなければ、その共同体社会のつまはじき者となり村八分となる。

7-2. 「恥の文化」

日本文化は「恥の文化」とも言われるように、古来日本人においては特に武力階層である武士や軍人においては、他人から受けるいわれなき恥辱は死をもってあがなうしかなかった。いわれなき恥辱を受けた場合の行動は、敵を殺すか、自分を殺すかのどちらかしかなかった。赤穂浪士四十七人の討ち入り事件は有名である。これは主君の名誉を傷つけられたことに対する「汚名をそそぐ」行為であり、「義」に従った行動として広く承認、支持されてきたものである。一方、自分を殺す方に向いたのが旧軍における勝算なき突撃であった。敵の捕虜となって恥辱を受けるより死を選んだのである。

恥の文化は、人々が一生涯同じ集団で生活をする中で培われてきたものと思われる。稲作農村共同体における暮らしは、仲間全員で足並みをそろえ、同じ時に同じ行動をとることによってのみ維持継続が可能であった。この共同体では当然のことながら個人よりも集団の規律が優先され、個別の行動は違反行為として厳しく罰せられてきた。そのような違反者を出した「イエ」も同様に他の「イエ」から「ムラ」の恥さらしとして強く糾弾された。日本の集団における個人および組織が「恥」を極端に恐れた理由はここにあった。

しかしながら近年、「貧すれば鈍す」と言われるように、経済的苦境に陥った日本企業においては、背に腹は代えられぬとばかりに、日本の共同体組織の繁栄要因でもあった道徳の数々を目先の利益に換えてしまった。恥とか外聞という言葉は企業社会では死語も同然な状態であり、ついに永久繁栄の金の卵を目先の利益と交換してしまっただけである。四千とも四万とも言われているブラック企業群がこの急先鋒であり、日本という共同体を再起不能な破滅へと導いている。

7-3. 日本人における「恥」の意義

欧米人および日本人ともに「恥」という感情はあるが、欧米人における「恥」の意識と日本人における「恥」の意識は恐らくかなり異なったものであるだろう。この差は「個人」というものの在りかたや認識の差がもたらすものだと思う。

日本人における「個人」は古来常に稲作集団共同体の構成員としての位置づけにあり、あくまでも集団共同体あつての「個人」なのであろう。この個人の在りかたは稲作農業を主体として生き抜いてきた日本においては個の力を平準化・標準化することで固定した地域や場所における共同作業における集団の力を最大化する必要性から生まれたものに違いない。すなわち日本人にとってより重要なことは個人ではなくその共同体にあつたと言える。日本における共同体の最小単位は「イエ」であり、地域の最小単位は「ムラ」であつた。

一方欧米における「個人」は、移動狩猟民族における個々の構成員における自律的能力が必要とされるところから生まれたものであろう。次なる猟場、次なる放牧の場を探し求めるにあつては集団の構成員個々における探査能力という自律的な能力が必要とされたものと思われる。欧米における「個人主義」の原点はこの自律性をもつ「個人」にあつたものと思われる。集団はあくまでも自律性を持った「個」の集団であり、「個」を結びつけていたものは「契約」すなわち神との誓約を媒介とした「契約」であつたと言われている。

日本における社会構造的な行動の基本単位とは「イエ」「ムラ」であり、一方欧米においては「個人」と「契約」に重きがおかれたものと言える。それぞれの社会構造の基本単位はそれぞれの民族がこの世を生き抜く基本単位であり、その消長盛衰の原点となるものである。人びとにおいてはその属する社会的な基本単位としての集団はその命の基であると言える。それなくして人は単独では生きられないのである。

さらに社会構造の基本単位においてはその機構を運用するために必ずその中に規範やルールというものが存在するだろう。人びとはその規範やルールに従わなければ、その集団では生きられず、特に集団同士の排他性の強い日本においては、集団から外れることは直ちに個人の死を意味する。

「恥」とは、集団の規範に違反したと見なされる場合に、他人から受ける非難に対して自分の中で発生する劣位の感情であり、また自己防衛の感情である。特に日本においてはその「イエ」に対する誹謗中傷は人に激烈な感情を引き起こした。封建時代においては家名を汚すものには、自己の死をもつても汚名をそそがなければならなかった。自分の家が他家に劣るということは、その属する共同体において劣位にあり、役に立たないものであるということになる。この侮辱ほど日本人を激怒させるものはなかった。「イエ」というものの存在感が希薄になった今日においても日本の共同体における「恥」の感情は個人を精神的に追い込み激情に走らせる原因となっている。封建時代においては汚名をそそぐエネルギーは外に向かって発揮されることが多かったが、近年そのエネルギーは自分自身に対しての攻撃に向けられるようになってしまった。このことは欧米と異なり自律性に欠ける日本人を更に陰湿な状況に追い込む結果を生み続けている。空気を読み、真実を見て見ぬふりをする、横並びで出る杭を打つ、突出した個人による議論なき全員一致の合意、そばで倒れている者を平気で見捨てる、一人で利を囲う、など本来の日本の伝統的規範とはおよそかけ離れた恥さらしの行為に日本中が染まっている。これでは決して日本国内における競争はもとよりグローバル化した激動の世界競争を勝ち抜くことはできない。

過剰な自己防衛の態度は一転して過剰な自己攻撃の元となり、日本人における極端な感情のぶれや行動のぶれの原因となっているものと思われる。本来の忍耐とはこの様な左右にぶれた不愉快な状況を我慢することに発揮すべきではなく、左右両極端ではないもう一つの道理にかなった妥当性のある道を探ることに発揮されなければならない。

いわれなき誹謗中傷は斥けられなければならない。集団の力を借りて個人を圧殺するような行為は排除されなければならない。人間としておかしいことはおかしいと反論しなければならない。いじめられたまま泣き寝入りしてはならない。奪われたものは取り返さなければならない。弱者には手を差し伸べなければならない。多くをもっていれば譲らなければならない。無知ならば学問しなければならない。自分にやましいことがなければ堂々と立ち上がることだ。一人で戦えなければ同志を探すことだ。これが本当の日本における伝統的規範であると信じたい。

個々人が孤立してしまい共同体における伝統的規範が失われてしまった日本において今後日本人が取りうる精神的な態度は、個人における自律性の獲得すなわち個人の尊厳というものを通して過去の伝統的な規範を新たな規範として甦らせることにあるだろう。

現代の日本における行動規範はすっかり色あせてしまい、“利”というフィルターを通したのばかりが社会を支配しており、日本の行動規範の負の特徴と西欧の個人主義の負の特徴が合わされた二重の負の特徴が跳梁跋扈しているとしか思えない。

日本人が今後すすむべき道は、日本の伝統的な規範の明るい面を採り、同時に西欧の真に優れたものを採り入れることにあるに違いない。

7-4. 日本における恥の文化の現状～イジメとパワハラ

ある集団のすべての人間がある統一的な規範および文化に従っている場合は、それぞれにおける人間および集団の行動は、その規範や文化に従ったものになるであろう。例えば欧米においては罪の文化における行動規範にて人や集団は行動し、日本においては恥の文化における行動規範にて人や集団は行動するであろう。それぞれに趣きは異なるが、いずれにしても統一的な行動が行われるであろう。

日本の現状はどのようなだろうか。もし、ある個人や集団においてすでに恥の文化が喪失されていた場合、それらの個人や集団と恥の文化を持つ個人や集団が接した場合に何が起きるのであるか。例として「無恥」の集団に「有恥」の個人が入った場合について考えて見る。もちろんこの「無恥」の集団は「恥」だけではなく欧米の「罪」の文化も持ち合わせてはいない。“人”とは何らかの文化を持つものと定義されるならばこの集団は無文化すなわち「人でなし」の集団あるいは「無法者の集団」と言える。このような集団に「有恥」の個人が入った場合、この個人は無法地帯に足を踏み入れたのも同然となるであろう。この集団には統一的な行動規範がなく、あるのはただ利害関係だけの結びつきだけであろう。この集団に対しては「恥」の行動規範が全く通用していないため、「有恥」の個人は遅かれ早かれこの集団との間で一対複数の利害に関する闘争に直面することになるであろう。これは一人の人間と複数の野獣の闘争と言える。この結果は言うまでもなく、「有恥」の個人の敗北となり心身ともに手痛い傷を負い、命を失うこともあるだろう。

これが日本の学校で起きているいわゆる“イジメ”というものであり、組織集団における“パワーハラスメント”といういずれも傷害罪あるいは殺人罪に相当する凶暴な行為の原因である。これらの問題に遭遇したらさっさと逃げ出すしかない。敵は人ではない野獣なのである。逃げ出すことに何らの恥を感じる必要もない。

これらの現象は一家庭や一学校の教育の問題にしばしば矮小化される傾向にあるが、本当の原因は日本社会全体における急激な都市化がもたらした核家族化および個々人の孤立分断化による、日本の恥の文化の継承が途絶えてしまったことにあるであろう。子供も、教師も、勤労者も、経営者もみな孤立無援な状況を自由や便利と誤認したところが過ちの出発点であった。大勢が寄り合っただけをぶつけ合う遊びはオンラインネットによるゲームに取って代わられ、人と人の接触はメールに

取って代われ、情熱をぶつけ合う討議はテレビ会議とインターネットSNSに取って代われ、学校もオフィスも静かな沈黙の場と成り果ててしまった。実物の人間の集まらないところには本物の文化は育たないし継承もされないであろう。

かくして日本列島からは伝統的な行動規範は雲散霧消し、からくも法治国家における「遵法精神」コンプライアンス”ばかりが叫ばれるようになってしまった。現在まで真に日本における社会秩序を守ってきたものは不文律である日本の伝統的な行動規範である。法律はその社会的行動規範はおろか人間として最低限の規律さえも守れない無法者を対象としたもので、私どもは”コンプライアンス”精神を守る会社ですなどと言うことは、私どもは最低の社会秩序規範だけは守りますと言っているに等しいように聞こえるのである。コンプライアンスだけでこの日本の社会秩序が守り通せるわけもない。そう言うわけで今や、そのコンプライアンスさえ守れない大企業が続出しているわけである。

7-5. 「恥」に対する過敏症が招く悲惨な結果

日本人における無知の告白の妨げや失敗を認めたくない態度は「恥」に対する神経過敏さによる過剰な自己防衛によって引き起こされている。自分の立場上、知っているべき知識を持ち合わせていなかった場合における態度や何かの失敗をした場合の反応は洋の東西を問わずにそのことを隠したい誘惑にかられるものであるが、欧米人においては知らないことは知らないと正直に告白することや、失敗に対しては直ちに方向転換をすることを恥であるとは考えない。他方、日本人においては無知や失敗がたとえ事実であったとしても、その事実をなかなか認めようとはしない。これを認めることは非常に恥ずかしいことであり、自分の自尊心が深く傷つくために、どうしてもその場をとりつくり、何とかごまかせないものかと悪あがきをすることが多い。これらの悪しき性癖は「臭いものにふたをする」「水に流す」などの言葉で表現されている。

これは「恥の文化」の負の局面である。恥の文化は物事が良好に進んでいる時には麗しい長所として作用するが、物事が失敗した時や、うまく運ばない時には事実の隠蔽や失敗回避の遅れを招き、取り返しのつかない結果を招く場合が多い。この病的な態度や行動は個人および組織を躁鬱状態に陥れ、人や組織を極端な行動に駆り立てる原因となっている。

先の大戦時における軍の失敗や、事実の隠蔽の数々および近年における企業における同様の失敗や事実の隠蔽の数々がわれわれ日本人および国家に対しどの様に悲惨な結果を招いたかもう一度学習すべきである。

失敗の本質に学べない、本当の反省ができない、過去の教訓に学べない、不都合な事実を隠蔽するなど皆この過剰な「恥」の意識がもたらしているものと言える。これは伝統的な行動規範ではなく改めるべき**伝統的な悪癖**である。このような過剰な自己防衛による恥の回避行動をやめるだけでも、日本人および日本の組織共同体に本来の輝きと成長をもたらすことができるであろう。

失敗を振り返ること。失敗の中から真に学ぶべき教訓を汲み取ること。その教訓に基づき素早く次の行動をとること。これが日本の再生の原点となるであろう。

7-6. 「恥」を忘れた日本のリーダーたち

1945年の米国の占領軍においてすら日本人の最も嫌う「恥」について細心の注意を払い、その占領政策において日本人や日本国に対して誹謗や、嘲笑や、侮辱や、軽侮や、不名誉となるであろう行為を避けるようにしたと言うのに、近年の日本の企業群における日本人である勤労者や就職希望者である学生に対する扱い方は、個人に対する誹謗や、嘲笑や、侮辱や、軽侮や、不名誉に満ち満ちているように思える。

勤労者を正規雇用と非正規雇用に分けるやり方などに日本人として恥を感じずまた相手に恥を感じさせない思いやりがあるのか。リストラや追い出し部屋における対象者に対する侮辱、誹謗、嘲笑、軽侮のどこに日本人としての正義が見られるのか。就職面接における学生に対するいわゆ

る圧迫面接による侮辱、嘲笑、軽侮のどこに「仁」や「礼」があるのか。未経験者に対して、即戦力を問うことのどこに妥当な道理性があるのか。

8. 現代の会社組織の中を流れるもの

8-1. 現在の会社組織の中を流れるもの

現代日本の共同体の大部分を占める会社などの組織共同体においては、近年人びとの孤立分断化が進み、また経済環境の悪化による労働環境の悪化が人びとから生活および精神的な余裕を奪ったため、会社による社員の保護育成も手薄になり、上司や先輩による後輩に対するノウハウの継承や人材育成の行為も余り行われなくなり、同時に個人的なつきあひも敬遠されるようになってしまった。社長を親とも思い、上司先輩を兄とも思い、後輩を弟とも思えるような環境はもうすでに絶滅したかのようである。日本の会社における一家主義は現在の会社においては過去の理解しがたい昔話のようになってしまった観がある。

欧米の会社組織の中を流れるものは昔も今も「契約意識」である。以前の日本の会社組織の中を流れていたものは「恩」であり「情」であった。しかし現在の日本の会社組織の中に流れているものは何であろうか。人びとを追い立てる「もっと早く」「もっとたくさん」という非情で不条理で暴力的な言葉ばかりになってはいないだろうか。厳密な意味での欧米流の「契約意識」のない日本の組織においては、旧来の「恩」や「情」などの精神的な行動規範を失った先にあるものは、旧日本軍が壊滅状態に陥った時に司令部や参謀本部がとった行動とほぼ同じ人的消耗を何とも思わない全員無武装の剣だけによるヒステリックな総突撃の愚行しかないように思える。

日本の会社組織は決して運命共同体とは言えないただの烏合の衆的共同体にまで成り下がってはいけない。日本の会社組織を再生させるためには、欧米流の厳密な「契約」に基づく組織を欧米流の精神文化の理解の下にすすめるか、あるいは本来の日本の伝統的な強みを、古い「恩」という思想を現代的な「感謝」という言葉で甦らせ、人々の人生を託するに値する共同体組織を創り上げるかである。いずれにしても欧米流であれ日本流であれ「信」なき組織は存立できないということを知るべきである。

8-2. 統合化による全体作用の重要性

最も重要な徳として「誠実さ」が挙げられるが、この誠実さとは、何ごとをも欺かず自分の全存在をさらけ出すこと、即ち何物も留保せず、何物も伴って表現せず、何物も無駄にしないことであり、このことを禅語では「全体作用」と言っている。即ちこの「全体作用」とは、軍事戦略家であるJ. ボイドの言うところの人間の行動の背景的要素である「新しい情報」「経験則」「文化的伝統」「遺伝的資質」およびこれらの相互影響による「分析と統合」に他ならない。

「全体作用」と言うことについては、野中郁次郎はスクラム理論の元となった『ラグビー方式による新製品開発競争』の中で「日本やアメリカの企業では、ラグビーにおいて、チーム内でボールがパスされながらフィールド上を一群となって移動するかのようになり、「全体論的な方法」を用いている。」と述べている。またJ. ボイドは『勝利と敗北の方程式』の中で勝利の最大要因である「状況の理解と判断(Orientation)」について、「人の中に内在される心理身体的な知的な蓄積は、過去において経験した環境および変化によって形づくられるが、そのためには我々における遺伝子的な遺産や文化的伝統や過去の経験が必須である」と述べており、いずれも分離・分割・分業化により孤立され過ぎた人間および組織における心理および身体の全体的な統合化が必要であると言っている。これらの全体作用は人間および組織の健全・健康の回復を促進し真に価値あるものを生み出すであろう。）

注. 心理身体的とは、頭(感情・精神)と身体(行動)が連携している状態のことをいう。

8-3. 社会構造の変化と行動規範の変化

現在の日本人は、誰かのために何かをさせられている、仕方なくやっている、自分は犠牲を払っているという風潮ばかりに染まっている。この犠牲感とは欧米由来のものであり、旧来の日本人においては、自分の役割に対してこのような抑圧感、犠牲感などは存在しなかったと言われている。

一定の社会的行動規範に従っていれば安心な生涯を送れるという社会環境下においては、人はそれぞれに自分の役割を明確に認識することができ、その役割を果たせば良かった。最近まで日本人においてはその人生の地図があらかじめ用意されていた。その地図にしたがった社会的な行動規範も用意されていた。

しかしながら近年のグローバル化、金融の世界化の影響により現在の日本の社会構造は激しく揺さぶられ旧来の構造が破壊され続けている。製造業の空洞化は今や全ての産業におよび、いま日本で生き残っているものは組織の制御や知識を創造する部門のみになりつつある。この高度の産業的スキルのない勤労者たちを全て吸収するだけの産業は今のところ見当たらない。このような状況は勤労者の大多数を占める膨大な人びとを遊民あるいは棄民の状態に貶める結果を招くことは誰が見ても明らかなことである。

多くの企業はグローバル化もやむなしと考え、その組織の空洞化した部分を海外生産あるいは組織の多国籍化によって乗り切ろうとしている。果たしてそのようなことでこの問題を乗り切れるだろうか。企業はもっぱらその商習慣の違いのみをクリアすれば問題はないと考えているようだが、問題はそう単純ではないであろう。それぞれの国の文化は多種多様であり、その理解は困難を極める。それぞれの文化の違いは、そのままその社会の行動規範の違いである。その国の法律さえ守ればそこで仕事ができるなどと考えるのは浅はかな考えであろう。その法律でさえ守れなかった実例として、2013年9月米国で日本の有名大企業である九つの企業が違法カルテルで摘発され現地の日本人責任者たちは逮捕拘留され総額730億円もの罰金を科せられたという。同様の問題は過去にも発生し、現在においてもまた懲りることなく続いている。これが日本をリードしている超優秀な頭脳集団といわれる組織の実態である。

日本人、特に企業の指導者たちにおいて幾人が欧米や他の国々の伝統的な規範について理解をしているであろうか。われわれは欧米の精神的な基盤であるキリスト教文化について、中東におけるイスラム教文化について、インドにおけるヒンズー教文化について、中国における共産主義について、ロシアにおける共産主義について、どれだけのことを知っているだろうか。更に言えば、”利”のみにしか興味のない企業家たちは自分の国家である日本における文化や伝統的な行動規範についてさえどれだけ理解をしているであろうか。敵はおろか自分自身についてもよく理解していない人びとに先導されている現在の日本社会は非常に危険な状態にあると言える。

社会における行動規範とは社会を維持するための秩序規範であるとも言える。社会構造が変質すればそれまでの社会的な行動規範も機能不全となり秩序維持も困難となるであろう。伝統的な行動規範はその社会構造によって生み出されたものであるから、社会構造が変化すればそれに応じた新しい行動規範が必要になるであろう。今まさに日本において必要なことは、その伝統的な行動規範の何を引き継ぎ、何を修正し、何を新たに加えるべきかを検討することであろう。また現在の産業の空洞化、すなわち放逐された人びとを放置すれば近い将来日本という大樹の葉も枯れ落ち、その根も腐るであろう。自分の会社だけが生き残れば何をしても良いというような偏狭な精神ではみな共倒れになるに違いない。

持てる者は他に譲るべきである。その智も財も先人から後進のものへ、自分から他者へ、現在から未来へ、譲りゆずり受け渡す循環の中にしか繁栄の道はないであろう。

9. 日本共同体の進むべき道

9-1. 敗戦直後から見た日本の将来像

1946年、すなわち戦後わずか一年もたない時点において、ベネディクトは将来の日本の繁栄を予言するかのように次のように述べている。「日本は、もしも軍国化ということとその予算の中に含めないとすれば、そして、もしその気があるならば、遠からず自らの繁栄のための準備をすることができるようになる。そして東洋の通商において、必要欠くべからざる国となることができるであろう。その経済を平和の利益の上に立脚せしめ、国民の生活水準を高めることができるであろう。そのような平和な国となった日本は、世界の国ぐにの間において、名誉ある地位を獲得することができるであろう。」

実に驚くべき慧眼であると言わざるを得ない。まさに戦後19年を経て1964年(昭和39年)に新幹線を開通させ東京オリンピックを開催させ、もはや戦後は終わったと言わしめるほどの繁栄を達成したのである。

9-2. これからの日本人は何に拠って生きるべきか～失われた「枠」

日本人を固定化された「枠」の中で生きてきた人種とすれば、西欧人は開放拡散した世界の中で生きてきた人種だと言えるであろう。動物間の生存競争における勝利の原則は「力の集中とスピード」にある。日本人がその勝利の原則を日本列島という環境下で実現した形は村落共同体であり階層的な社会構造でありその伝統的な行動規範であったと言える。

一方西欧においては、開放拡散した見知らぬ人びとの間を結ぶための「契約」社会を発展させ、契約による力の集中を図り、精神的な集中のために一神教というものを創造したものと思われる。

いずれにしても人類は生きのびるための原則である「力の集中とスピード」を実現させるためにその場その時代の困難な生活環境に合わせてその社会構造および行動規範を創造していったものと思われる。

今日の日本における三つの枠、「地域共同体」と「身分制度」および「伝統的な行動規範」の状況はどのようなであろうか。

まず「地域共同体」においては、旧来各地における農村共同体である「ムラ」がその役割を担っていたが、農村人口は明治初期には八割もあったものが太平洋戦争直後においては約五割となり、現在においては約5%程度にまで激減しており、これに代わる共同体は都市部における会社組織であろう。明治以降現在に至るまで農村から都市への人口の移動は拡大し続け、労働の舞台は農村から都市へと移ってしまった。都市における労働の舞台は「会社」という商工業を中心とした専門的業務を担う組織となった。多数の農村出身者にて構成された会社組織は当然のことながら伝統的な農村共同体のやり方を引き継いでいった。すなわち終身雇用、年功序列、稟議による方針決定などの制度により安心を保障し忠誠を誓うに値する共同体として成長していった。

しかしながら近年における経済のグローバル化による日本の経済環境の悪化は種々のリストラと呼ばれる施策により終身雇用制は実質的に崩壊し、年功序列制は成果主義にとって代われ、稟議制は強力なリーダーシップの名の下に強権主義的なやり方が広く行われるようになった。このような環境下で会社の構成員たちの多くは、より取り分の少ない新たな階層である非正規社員という層にダウンシフトされ続けており、今や全労働者の約四割にも達する勢いである。戦前の農民の地位で表現すれば、自立的な自作農から悲惨な水飲み百姓と呼ばれた奴隷的地位にも匹敵する小作農への転落である。

このような会社共同体はもはや自分や家族の安心を保障してくれる運命共同体とはなり得ず、誰においても忠誠を誓う対象とはなり得なくなってしまう。

次に「身分制度」については、明治時代に入って、四民平等すなわち士農工商等の公式の身分撤廃が行われ、戦後においては貴族制の撤廃も実施され公式の身分制度はなくなったが、それらに代わる身分階層として学閥による階層化、学歴による階層化、企業規模による階層化などが進展してきたが、近年においてはさらに労働者階級においては非正規雇用による最下層の形成が急激に進んでいる。一億総中流化といわれた黄金期はすでに過去のものとなり、平均的な日本人がそれ相応の安心と忠誠を誓える身分の確保は不可能となってしまっている。ここにおいても日本の伝統的な精神的規範である「すべてのものをあるべき所に置く」という日本のモットーは崩壊しつつある。

最後の「枠」である「伝統的な行動規範」はどのようなであろうか。日本人における伝統的な行動規範は、人々の安心と命を託すことに値する共同体を維持運営するものとして恥の文化、仁、義、礼、智、信、誠意、長幼の序、分相応などの道徳性を進化させてきたものである。これらの伝統的な行動規範が機能するのは自分や家族の命を託すことができると信じられる運命共同体においてのみである。

現在の企業組織においてはこれらの道徳的行動規範は行われているであろうか。否であろう。コンプライアンス(遵法)というカタカナ言葉が使われるようになったころから企業は法律に触れなければ何をやっても良いと考えているふしがある。結果、その法律も守れず違法行為に走る企業も後を絶たない。法律を守ることは国民の義務における最低限の線であり、この最低限の線を目指することなど企業指導者層における人間的レベルの劣化および組織能力の劣化しか感じられない。

多くの企業共同体は、恥・仁・義・礼・智・信・誠意・長幼の序・分相応など諸々の日本人における共同体における精神的な基盤を次々に”利”と交換していったものと思われる。企業共同体においては、最後の日本人の安全保障の「枠」である「伝統的な行動規範」も失われてしまったのも同然の状況である。

これまでに明治維新および今次大戦における大敗北における未曾有の日本の窮地を救うのみならず世界に冠たる繁栄のエンジンともいえる伝統的行動規範を”利”に交換してしまった企業組織に今何が残っているのであろうか。日本人およびその共同体を守り育てた伝統的な行動規範を捨てた後、何に拠って生きのびようと考えているのだろうか。

現在やっていることは人的消耗戦による他人の血と汗を”利”に変えることだけだと言ったら言いすぎであろうか。

今われわれ日本人が必要とするものは、多くの日本人がその命を託すに値する新たな枠組みの構築であろう。

一には地域の枠に代わって道徳的行動規範の上に構築された有機的な人間のネットワークであり、二には身分制度の枠に代わって役割分担の価値観に基づいた公平な所属場所の構築と、最後は日本の枠にとられない全ての人類に貢献でき得る新たな道徳的行動規範の再構築であろう。

はっきり言えることは、人間を”利”と交換してはいけないということ、”信”を”利”と交換してはいけないということ、多くの心の支えである徳の数々を”利”と交換してはいけないということである。

9-3. 相互義務の履行

日本の社会におけるさまざまな束縛やルールは本来その仲間の者たちとの連帯性を保つためのものであって、その義務は相互的なものであったはずである。しかしながらその日本的ルールが一方的な義務となっているのが今の日本の現状である。大企業は下請け企業にその義務と責任を「利」と交換に押し付け、道に外れた上司は部下にその義務と責任を押し付けている状況が広く日本全体を侵食している。自分さえ良ければいいというような行動規範は日本のものではない。そこ

には日本の伝統的な行動規範である、人を思いやる「仁」も、私利私欲に捉われない「義」も、敬意をもって他者と接する「礼」も、知恵を重んじる「智」も、誠実さである「信」のかけらさえ見ることができない。今あるのはすべての善きものを「利」に換えている醜い日本人の姿であり、これらの行動が組織の根底を破壊し続けているということにすら気づかない日本のリーダーたちの決定的な愚かさを示していると言えよう。一方、このような仕打ちに耐えるだけの者たちも、本来のあるべき日本人の精神を知ることなく、「仕方ない」というあきらめの深い淵の中であえぐのみで、これもまた同様に非常に愚かであると言わざるを得ない。少しの勇気を出し不条理を排し自己を再生するところに明日の希望が見えてくるはずである。

古来日本人は常に連帯を保ち、その共同体の上位の者も下位の者もともにその応分の責務を果たし、弱き者を援け、利己を廃し、義をもってその行動規範とし、この日本列島において幾多の天変地異や戦火をくぐり抜け数千年を生きのびてきた。共に手と手を携えて生きる精神の中にこそ日本人の生きる道があるということをその伝統的な行動規範の中に再度発見すべきである。優位の者こそ大きな義務と責任を負うこと、すなわちノブレス・オブリージュの精神こそが繁栄の永続的な循環を生み出すことに気づくべきであろう。

9-4. 日本的共同体の進むべき道

直接的な競争を避ける態度を表す言葉として「分相応」とか「分限」が使用されるが、この「分」は本来「その人の身分や能力にふさわしいこと」を意味するもので、日本においては特にその身分に重点が置かれ「その人の身分にふさわしいこと」が求められてきた。すなわちその所属する階層にふさわしい振る舞いが求められるのであって決して競争を促すものではなく「和をもって尊しとなす」なのである。

このような直接的競争の制限は、決まり切ったことを決まり切ったように実行するだけですむ平時においては共同体成員の平和的關係を維持する力として有効に作用するであろうが、社会環境が変動あるいは激変している場合にはまことに不都合な結果しか生み出さないであろう。平時において競争原理で訓練し鍛え上げられていない人びとにおいては一旦その社会環境が厳しい競争原理に基づく環境に変わった場合、ほとんどその環境に適応することができない状況下におかれるということになる。現在のグローバル競争時代がまさにその時であり、日本全体がその競争力を削がれ国内産業が空洞化している一因もそこにあるのであろう。

安定期においては各位各層における競争なき融和がその団結力すなわち力の集中の元として作用し、他の集団との競争や闘争の役割はかつての武士階層や明治時代における指導層がそうであったようにその共同体の上位層がその役割をもって行動をしてきたのがこれまでの日本の姿であった。つまり日本においては社会活動の基礎を個人に置くのではなく階層的共同体そのものにおいたものと言える。この構造は一定の条件下においては非常にうまく機能するが、その条件が満たされない場合にはその脆さを露呈してしまうことになる。

日本におけるトップ集団内においては非常に厳しい自己抑制や自己犠牲が要求されると同時に他の集団との競争に勝利するための過酷な訓練や学習が要求され(ただしこの集団内においても和を乱すことは許されなかった)、敗北は決して許されるものではなかった。

かつての日本の他国との競争における勝因はこの共同体の原理の中にあつた。心身ともに鍛え抜かれ文武両道を備えた上位層における「素早く集団を導く力」と協調の精神により団結力を備えた下位層における「力の結集力」を生み出すその独特の共同体構造は数々の戦いや競争においてその勝利の原則である「スピードと力の集中」を実現させてきたのである。

これらの日本人およびその共同体特有の強みをその根底で支えている条件を崩すものは恐らくその特有の思想の負の特徴であるに違いない。古来種々の集団や文明の消長盛衰はそれらが保有する特徴的精神や行動原理によって栄え、また同じものによって亡びてきたものと直観される。

日本人および日本の集団は、その「スピード」と「力の集中」を実現してきたものと同じものによって、その同じものの持つ負の局面によって競争に負けあるいは戦いに敗れ衰退をするのであろう。日本人および日本の集団における「スピード」と「力の集中」の根底を支えてきたものは先に述べたように、その階層ごとの明確な役割の認識と各階層内および階層間における「和」に他ならない。日本人の共同体を衰弱させるには、その全体を貫く「和」を乱し、各層における役割の認識を失わせることが最も効果的なことであろう。

トップ集団においては個人の「利」を最大の目標に置くことでその倫理性を失わせ、道理なき過剰な個人戦を行わせることでその役割の認識を失わせ、トップ集団内における「和」を消し去り、俗にいう「仁義なき戦い」を生み出せば、このトップ集団は一個の企業であれ一個の国家であれ、その中枢機能は麻痺し下位総集団の統率力および主導力を失う結果を引き起こすことになるであろう。

次に下位集団においては、その中に更なる下位集団を作り出すことによって人びとの命のもとである分け前自体を減らすことや異常な過重労働を強いることでその共同体に対する忠誠心を失わせ、人びとを孤立化および分断化することでこの集団の最大の特徴である「和による力の集中」を消し去り、「寄る辺なき民」を生み出せば、トップ集団もろとも総崩れの状態に陥ることは間違いないことであろう。

このような状況がグローバル経済競争や金融偏重経済や自由競争原理主義者たちによって日本を覆いつつあるという認識が必要であろう。これらの状況や環境の変化は自然現象で生み出されたものではなく、どこかの誰かによって生み出されたものであり、唯々諾々とこのような状況に追従するばかりのやり方ではわれわれの将来は悲惨なものになってしまうであろう。

われわれの共同体がめざすべきは、**第一に人材の抜擢および育成**である。カネでもモノでもなくヒトである。組織の消長盛衰はすべてヒトによる。日本の伝統的規範である「分相応」のもう一つの面である「その人の能力にふさわしいこと」をその通りに実行することである。学歴学閥や既存権力閥によらず「その人の能力をもつ人に、その能力にふさわしい仕事をまかせる」ことに尽きるであろう。多くの会社においては人事抜擢制度があるが実際にこれが実行されることはめったにない。会社トップにおける抜擢人事と呼ばれるものがたまにニュースに載ることもあるが、その実体は一種のパワーゲームである場合が多いのであろう。会社内のその他の層における抜擢人事などほとんど行われてはいないであろう。機能不全に陥った組織においてさえ抜擢人事は行われにくいのが現実である。自分が獲得した権力や地位はあかの他人にくれてやるよりも犬猫にくれてやった方がましだと考える人も多いことであろう。欧米においては、仕事の役割というものが先にあり、これにふさわしい能力をもっている人を探しこの役割にあてるという「役割中心主義」にて運営されているが、日本では先に人というものがあり、その人に後付で仕事の役割を振付けるいわゆる「属人的制度」が定着している。特に人材の流動が少ない企業においては全くその通りであり、抜擢人事とは言っても、その立場や身分の継承的意味合いが強く、その果たすべき役割の継承能力という意味合いは薄い。上から下までこの様では真の貢献度による信賞必罰や毀誉褒貶などが行われることもなく、あるのはただ閥間の権力闘争による巨大な内部エネルギーの消耗だけであり、結局最後には誰も得をしない組織全体の衰退と崩壊を迎えることになる。日本の伝統的な規範である「分相応」の悪しき負の面である「身分相応」を捨て、本来の真の「能力相応」の階層を構築し、それぞれの人があるべき職責を自覚し、優れたものは後進の者を育て、後進の者は先の者に学び、共に同じ目標に向かって前進する人間共同体の構築を行うことが先決問題である。

日本人は、常にこの「能力相応による分相応」という伝統的な行動規範を甦らせることによって幕末や先の大戦の大敗北という危急存亡の状況を乗り越えてきたのである。われわれは伝統的行動規範の両面を常に意識しつつ、その何を安定期に適用し、そのもう一面の何を変動期に適用すべきかを自覚する必要があるだろう。これらは日本における伝統的規範の二重性を意味するも

のではなく二面性を意味するものである。すべてのものごとは表があり裏がある。表に日が差せば、裏は影となり、今日の表は、明日は裏となるのが世の理であるだろう。日本における伝統的な行動規範はそのような千変万化の環境の変転に耐えて今日まで伝承されてきたものであろう。一時の権力者の都合の云々によって簡単に損なわれるものではなく、われわれ日本の民衆の共通の財産であるだろう。

第二に現在われわれが陥っている苦境を振り返り、分析することによる**失敗の真因の特定**が必要である。失敗の真因を隠蔽する者たち、失敗の経験に学ぼうとする姿勢のない者たち、既得の自己の権益のみに執心し共同体の共通の繁栄を阻害する者たちは、新しい共同体の成員にはふさわしくないであろう。少ない収穫においても広く皆で分かち合うことが伝統的な日本の共同体における「和」の精神の本質であろう。われわれの祖先が幾多の天災・人災・戦火をくぐり抜けこの列島で生き抜いてくることができたのは、弱者も強き者も共にその役割を全力で果たしてきたからであろう。自分だけが良ければいいという考え方は日本人およびその共同体を必ず衰退させるに違いない。

第三に失敗の真因に基づいた対策、すなわち次に進むべき**目標の設定と実行**であろう。日本人および日本の共同体は、新たな目標を自らの手によって創造することが苦手であることを十分に認識する必要がある。農村共同体時代における目標は数千年来変わることのない稲作によるコメの収穫であり、口に出すまでもなく国民における自明の理であり、新たな目標の発見は不要であった。明治以降の目標は「欧米に追いつき追い越せ」であり、お上から下さる目標に向かって邁進すればよく、自らの頭で目標を考える必要もなかった。戦後においてもこの状況はほぼ同じであったと言える。かくしてジャパン・アズ・No.1と呼ばれるようになった1979年に日本はその目標を見失った。目の前にあった、あの輝くばかりのアメリカ製のテレビも洗濯機も冷蔵庫も自動車もみんな消えてしまった。全て日本製に置き換えられた先に自分たちの目標は見えなくなってしまった。その後の日本の目標は新しいわくわくするようなモノの創造ではなくコストダウンすなわち”利”を追いかけることしか見えなくなってしまった。その後今日に至るまで”利を負う者は利を失う”と俗言にいう通りの道を歩み続けている。

新たな目標の創造は困難を極めるであろうが、産業の基本である「人が困っていることを解決すること」にもう一度立ち帰れば、いろいろなモノやコトが見えてくるはずである。

”利”だけの視点や大量生産という視点とは違った見方は新たな価値を発見するきっかけを創るだろう。道理にかなった妥当性のある目標とその実行は共同体における人びとの「不安」を一掃し共同体に対する「信」を取り戻す第一歩となるであろう。

参考文献

『菊と刀 日本文化の型』The Chrysanthemum (クリサンセマム) and the Sword—Patterns of Japanese Culture(1946) ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳、社会思想社、1972年

『日本人と組織』山本七平著、角川書店、2007年